

最近思う事

大木 錬山

原爆炸裂後五十七年が経過し、被爆者である私の両親の内、父は既に二十五年ほど前に鬼籍に入り、母もはや齢八十三歳となりました。被爆者の高齢化・被爆経験の風化は必然であります。

このような時期、先日の福田官房長官の（非核）発言は一体どのような意味を持つてゐるのでしょうか。

有事法制、憲法改正、個人情報保護法案、雇用問題、教育改革などなど、熟慮すべき喫緊の課題は山積していきます。

それにしても貧しい一般庶民にとりましては、世知辛い世の中です。天神や博多駅でホームレスの人たちを見る度、あんなになつてはいけないとは思いながらも、明日は我が身、と暗澹たる思いに駆られるのは決して私一人ではないでしょう。

現実世界では未だに核抑止力理論が罷り通り、未臨界核実験・ミサイル実験が強行され、果ては印パの核戦争さえ危惧されている始末です。

パンドラの箱は日本で開けられました。その筆舌に尽くし難い惨状は全世界の共有財産であります。唯一の被爆国日本にはそれを伝え、発信し、平和を訴える責務と資格があります。

原爆文学研究会をはじめ、各種被爆者団体の方々の核兵器廃止のための奮起奮闘による地道な活動は絶対に必要です。

原爆文学研究会

第3回例会寸感

南嘉久

私は、2002年6月29日（土）原爆文学研究会の第3回例会に参加することができた。その中の研究報告で報告者から「これまでの原爆文学に不満がある」

その一つとして「原爆文学の中に元気な被爆者はどうして登場しないのか？」という問題提起がなされた。

報告後の質疑の中で、今元気な被爆者を描くことが求められているのか、核戦争の脅威が高まつている現在被爆者が元気あることを描くことはアメリカを喜ばせるものになるのではないかという疑問が出された。報告者は、被爆者が困難を抱えているのは事実であるが、その一方で元気な被爆者や被爆二世がいるのも事実である、文学はどうしても悲劇を描こうとするのでステロタイプ化してしまうが元気な被爆者を描いた原爆文学があつてもいいのではないかと応えた。また、被爆者が元気であるという話はかつての原爆が人間に何をもたらしたのかということを消してしまって、ただ、一方で被爆の実相、人間に与えた影響を訴えれば訴えるほど差別構造をもたらすという側面もあるという発言もあつた。

時間が残り少なかつたので議論はそれ以上深まらなかつたが、興味深い問題提起であつたし、私は報告者の問題提起に同感するところもあつた。

ただ、報告者、発言者とともに「元気な被爆者」と表現したのは適切ではないとも考えた。「元気」という最初の言葉にお互い引きづられたのだろう。要は、被爆者を人間としてどう深くとらえ、描くのか、ということを求められているのではないだろうか。

私自身は長崎生まれの被爆二世である。父と母がともに被爆者であり、父は原爆で子供たち4人をなくした。父と兄はそれぞれ原爆のために心身に深い傷を負い、人生の半ばで死んだ。

私の高校時代、友人の一人が急性白血

病で入院後まもなく死んだ。彼も被爆二世であった。

私自身被爆二世としての運命を背負っているのだろう。その自覚はいつも私の意識の底に棲みついている。折に触れ意識にのぼることもある。しかし、それは私自身の日常意識や存在感覚の一部でしかない。

被爆者、被爆二世の一つの側面（それは大事なことであるが）だけでなくもつと人間存在の全体を深くとらえていいのではないかだろうか。人間としての能動的な姿をとらえていいのではないだろうか。

実は、被爆者も被爆一世もさらにそれが文学であれ運動であれ。

以外の人も含めて人間存在の根底に合通じるいのちや生きるということについて深く抽象する力が求められていると私は考える。そしてその抽象をふまえて一人ひとりの被爆者や被爆二世を具体的にまるごと描き出すことが今必要なのだろう。